氏　　名　秋富克哉（あきとみかつや）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　論文博第 448 号
学位授与の日付　平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目　芸術と技術—ハイデッガーの問いの射程—

論文調査委員　（主査）教授 氣多雅子　教授 岩城見一　助教授 杉村靖彦

論文内容の要旨

本論文の目的は，ハイデッガーの有の問いのうちに，「芸術と技術」の主題の所在を探り，その内実を考察することである。ハイデッガー研究の立場から「芸術と技術」という主題を掲げる根底には，この主題がハイデッガーの思索全体を捉えるための一つの，しかも決定的な切り口になりうるという確信と同時に，ハイデッガーの思索に即したこの主題の究明が，現代の我々にとっても緊急の課題であり，したがって彼の思索が今なお大きな意味をもつという確信が存している。本研究は，この個人的な確信をハイデッガーのテキストに即して跡づけていくことによって，ハイデッガーの思索の可能性を取り出すと同時に，普遍的な主題としての「芸術と技術」そのものの可能性を改めてその内実において検討することを目指すものである。「ハイデッガーの問いの射程」という副題は，そのことを示している。

一，「芸術と技術」の主題化

まず，ハイデッガーにおける「芸術と技術」の主題への接近を，基本的な事柄の確認から始める。それは，ハイデッガーが「芸術」や「技術」を問うとき，常に古代ギリシアにおける「テクネー」に遡るということである。「テクネーはアレーテウエイン（真理認識）の一様態である」というアリストテレスの『ニコマコス倫理学』に由来する定式は，一九二〇年代初めの時期から晩年に至るハイデッガーの「テクネー」理解を貫いている。

ただし，ハイデッガーによれば，古代ギリシアにおける「テクネー」は，「芸術」と「技術」とをいわば未分化のままに含んだ一つの知の様態，つまり「ポイエーシス（制作）」の中で働く知であって，第一義的に特定の活動を指示するものではない。したがって，「テクネー」は，古代ギリシアという西洋思想の源流にありながら，今日の我々が考える「芸術」と「技術」の両領域にまたがる概念と言える。

しかし他方，同じ語に由来する両者が，今日，正反対の響きを伝えることもまた事実である。すなわち，「技術」が先端科学と結びついたテクノロジーの巨大な力となって人間に様々な脅威を与えているのに対し，「芸術」は人間を日常の空間から解放し，精神的な安らぎを与える，というようにしばしば受けとめられる。

だとすれば，「芸術と技術」という主題には，単に未分化の知だけでも極端な対立だけでもなく，「テクネー」という同じ由来に遡る「芸術」と「技術」が対立の局面を示すにいたった西洋の歴史全体が畳み込まれていると言える。しかも，メディアアートに代表される現代芸術には，過去にはありえなかった新しい意味での「技術」と「芸術」の協働や融合が存しており，その現実もまたハイデッガー自身の生きた歴史の延長にあることを踏まえれば，「芸術と技術」という主題はいっそうの拡がりを示してくる。重要なことは，西洋の歴史が畳み込まれた「芸術と技術」に，ハイデッガーの思索の展開そのものが畳み込まれているということである。

そこで，この主題をハイデッガーの思索の展開においていっそう明らかにするために，「芸術と技術」が実際に主題化した二つの事実を確認しておく。

第一は，一九三九／四〇年の冬学期講義が「芸術と技術」という表題のもとに行われたという事実である。この時期は，『有と時』（一九二七年）で決定的な第一歩を印した「有の問い」が後の展開の方向性を模索しながら，その一方で，『有と

時』の著作としての途絶が決定的になっていく時期にあたる。三〇年代以降「芸術」や「技術」への言及が目立つようになり，やがて，「芸術と技術」は講義の表題にまでなる。しかし，全集の公刊で広く知られるようになった講義録の中にあって，この講義は当初の計画の変更によって全集リストからはずされ，今日そのままの姿で知ることはできなくなった。そこで課題となるのは，この講義と同時期の他の講義録や覚え書き，とりわけ一九三六年から三八年にかけての『哲学への寄与（性起について）』や『省慮』等を参考に，この時期の「芸術と技術」を復元することである（第四章）。

「芸術と技術」について第二に確認しておくべきは，一九八九年にハイデッガー自身の生誕百年を記念して公刊された論文集の一つ『芸術と技術』の巻頭に置かれたハイデッガー自身の未公刊の覚え書きである。ハイデッガー自身によって「技術と芸術—集立態」という表題の付されたこの覚え書きは，五〇年代に展開する技術理解を背景に持っている。したがって，同時代の立場を踏まえ，この覚え書きに記されている芸術と技術の同時的・並列的な関係と通時的・歴史的な関係を読解することが求められる（第六章）。

二，世界における意味

ハイデッガーの思索の展開の内に「芸術と技術」の主題を問うていくに際し，ハイデッガーと現代の我々が共有できる問題連関として，本論文は「世界における意味」，あるいは端的に「世界の意味」という契機を提示する。

この契機は，ハイデッガーが，一九五五年に故郷で行った講演『放下』に由来するものである。この講演は，世界が原子力に代表される現代技術の脅威にさらされ，人間も立つべき地盤を喪失しているという洞察のもと，そのような状況下にいかなる可能性が残されているかを語りだしたものである。その中でハイデッガーは，「技術的世界の意味は覆蔵されている」と語る。この言葉にこそ，彼の思索の根本問題が，そして彼の思索から現代の我々が汲み取るべき契機が潜んでいると見なされる。考察は，この発言に含まれているハイデッガーの思索の契機を取り出し，その内実を現代世界の中で吟味することに向けられる。そして，このような発言がどのような地盤から生い立ってきたかを明らかにするために，この問題連関に沿ってハイデッガーの思索の歩みを検討することが，本論文を一貫する関心事である。

ハイデッガーの「有の問い」において，「世界」と「意味」はともに重要な位置づけを与えられながら，思索の展開にしたがってそのつど内実を変えていく概念であるが，「意味」が常に「覆蔵されたもの」として問題になるということは一貫している。

本論文の特色は，この「世界に覆蔵された意味」の契機をハイデッガーの思索の一貫したモチーフと見なし，その契機を「芸術と技術」という世界経験との連関で探ることにある。従来のハイデッガー研究は，晩年のハイデッガーが自らの思索の歩みを「意味—真理—場所（トポス）」という三つの主要語の継起で捉えていることに定位して，「意味」の立場が中期以降は放棄されるという解釈でほぼ一致しており，そのため，中期から後期にかけての「意味」の問題はほとんど掘り下げられてこなかった。しかし，本論文は，現代技術の本質が問題化する中期から後期への展開にこそ，「覆蔵された意味」の探求がなされるべきであると考える。したがって，「有の意味への問い」が「有の真理への問い」へ，さらに「有の場所への問い」へ移ることは，決して「意味」への問いが捨て去られたことを意味するのではない。そこで試みられるのは，ハイデッガーが「真理」や「場所」への問いをそのつど「意味」への問いとの連関で捉え直していることを，ハイデッガーが中期以降自覚的に用いる「省慮（Besinnung）」の語に即して把握し，そのことによって「意味（Sinn）」そのものの探究の過程を考察することである。

ハイデッガーが一九七六年に死去して約四半世紀，彼が真剣に問うた情報技術は，この間にとてつもない進歩を遂げ，世界はめまぐるしく変貌した。しかし，情報技術に代表される現代技術の進歩が「技術的世界に覆蔵されている意味」を明るみに出したとは言えない。むしろ，「意味」やその問いかけをますます覆蔵していくところに現代技術の恐るべき特性が看取される。その限り，「世界に覆蔵されている意味」への問いが語られる後期の思想，そしてそれを準備する中期の思想に「意味」の契機を探ることにこそ，ハイデッガーの現代的意義を見出す端緒が存する。

三，本論文の構成

ハイデッガーの思索における「芸術と技術」の主題を「世界における意味」という問題連関に映しながら，ハイデッガーの有の問いの歩みを考察することが本論文の全体の構成を成している。

これまで触れたように，ハイデッガーにおいて芸術と技術が主題化するのは一九三〇年以降のことである。しかし，全集

における講義録やその他の資料の公刊によって初期のフライブルク時代，マールブルク時代の思索の歩みが知られるようになり，特にアリストテレスへの積極的な取り組みのうちに，古代ギリシアにおける「テクネー」や「ポイエーシス」への関心が存していることが明らかになった。そこで第一章では，二〇年代前半の思索の中に「テクネー」や「ポイエーシス」が問題化する連関を探り，研究全体の出発点としている。中期以降の「芸術と技術」の展開に，初期の「テクネー」受容を関連づけることも，本論文の特色の一つとなっている。

次いで，第二章では『有と時』を取り上げ，この書で立てられた「有の意味への問い」の中に「テクネー」や「ポイエーシス」の動く地盤を探りながら，その分析が持つ意義と問題性を，『有と時』そのもの，およびそれ以後の展開に即して考察している。

第三章は，『有と時』における世界分析とその後の展開の中から，「道具」分析との連関で「作品」が新たに主題化する過程を，エルゴンについてのアリストテレス解釈に即して押さえ，そこから『芸術作品の根源』を検討している。そこには，道具と芸術作品各々に対する「世界」の関係が映されており，世界への問いを軸にして，『有と時』の自己超克的な思索の試みを見出すことができる。

ところで，芸術作品に向かう新しい思索の方向性の背後には，この時期からハイデッガーの思索を導くようになる「性起」の思想が存している。第四章では，最近ほぼ十年の間に公刊された三〇年代後半の膨大な覚え書きの読解を通して「性起」の思想を考察している。

ヘルダーリンの詩作の語に由来し，独自な意味づけとともに中期以降の思索の根本語となる「性起」は，それ自体が生成展開していく思想であり，その展開の中に，中期以降のハイデッガーの思索を探る鍵がある。三〇年代の「芸術」理解も，後の「技術」理解の萌芽となる「作為機構（Machenschaft)」も，「性起」との連関で理解される。そして同時に，「性起」をめぐる思索が，「意味」への新しい試みである「省慮」として確認される。問題は，その新しさが如何なるところに，如何なる仕方で見出されるかである。これらの問題を考慮しながら，三〇年代末の「芸術と技術」の第一の主題化について考察を行う。

第五章では，「性起」の思想を踏まえ，独自なニーチェ解釈を検討する。ニーチェとの対決はニヒリズムの超克という根本課題をめぐって，「芸術」の本質と可能性，「技術」による大地（地球）支配の根拠を問う。ニヒリズムそのものが「意味」の喪失を孕む事柄である限り，両者の対決は必然的に「世界における意味」への問いと結びつく。「力への意志」「同一物の永劫回帰」「超人」などの根本思想に対する独自な解釈もまた，「芸術と技術」という主題に即して検討される。それはさらに，四〇年代の思索の大きな展開を跡づける作業にも繋がっている。

第六章では，一九四九年のブレーメン講演『あるところのものへの観入』を中心に考察を進めている。この連続講演において，一方では，世界が「四方界」として捉えられて「世界と物」が考察され，他方では，ニヒリズムの極限の様態として規定される現代技術の本質が「集立態」や「危険」などの独自な語によって語り出される。それは，「技術的世界に覆蔵されている意味」の背景に存する技術理解を示している。この新たな思想の枠組み全体を踏まえながら，「芸術と技術」の第二の主題化として言及した先の覚え書きを検討することが，この章の課題となる。問題は，対立する二つの世界，つまり「四方界」と「集立態」が如何に関わるかということである。この問いは，ハイデッガーの立場に対して突きつけられる根本問題であると同時に，現代世界が今日直面している根本問題でもある。

第七章は，前章で考察した事態を踏まえて，言葉への問いを独立させて扱っている。「言葉」は，ハイデッガーの有の問いにとって，出発点から決定的な事柄であり，とりわけヘルダーリンの詩作への取り組みは「思索と詩作」についての独自な理解をもたらした。その主題は，五〇年代以降，さらにトラークルやゲオルゲなどの詩人において掘り下げられることになる。その一方で，現代技術の本質についての思想の展開は，「情報」としての言葉の問題性を「詩作」としての言葉との連関においていっそう際立たせる。「芸術と技術」は，「言葉」をめぐって最大の尖鋭化にもたらされる。その際，芸術における「詩作」と技術における「情報」とが，「言葉」ゆえに際立った性格を与えられるとすれば，その根拠がまさしく「言葉」の問題として考察されなければならない。さらに，本論文の問題連関に即せば，「言葉」は「世界」を映すと同時に，「言葉の意味」として問題になる。この章では，最後にその問題を検討している。

最終章では，現代の技術世界における可能性をハイデッガーの思索に即して考察している。まず，「放下」という人間の

可能性を踏まえながら「技術的世界に覆蔵された意味」を考察する。そこに，ハイデッガー思想の技術的世界における可能性が探究される。この可能性への問いは，同時に，芸術への問いに向かう。具体的には，後期のハイデッガーが向き合った芸術や芸術家，すなわちクレー，セザンヌ，東洋芸術などへの洞察を通して，晩年のハイデッガーの芸術理解を検討している。

本論文は，以上のような考察の歩みを通して，「芸術と技術」を生成する主題と捉え，その主題からハイデッガーへの接近を試み，彼の思索の射程を現代的立場から明らかにすることをめざしている。そこに，ハイデッガー以後の世界にあって，ポイエーシスをめぐる西洋的知（テクネー）の伝統からの目配せを受けながら，新たな「制作」ないし「創造」の知を見出すための第一歩が意図されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，ハイデッガーの初期から晩年にわたる思索の全体を「芸術と技術」という主題によって一貫して読み解き，そこから，ハイデッガーの思索の射程を浮かび上がらせるとともに，彼の思索の現代的意義を取り出そうとしたものである。芸術と技術の問題に後期ハイデッガーの中心課題を認める先行研究は少なくないが，本論文のように，芸術と技術の関係性に焦点を定めてハイデッガーの全思索を読解する試みは，きわめて独創的なものだと言える。

だが，論者も述べているように，ハイデッガーの思索を貫く根本の問いは「〈ある〉とはそもそも何であるか」という「有の問い」である。この根本の問いに照らして，「芸術と技術」がハイデッガーの思索全体を貫く根本的主題であることは，ハイデッガーのテクストにおいて決して明示的ではない。「芸術と技術」という表題をもつ一九三九／四〇年冬学期講義および「技術と芸術—集立態」という表題の一九五三年の未公刊の覚え書きにおいて，「芸術と技術」が主題化されていると言っても，それだけではこの主題が全思索の根本主題であるとは言えない。また，ハイデッガーは三〇年代以降「技術」或いは「芸術」について言及し始め，四〇年代，五〇年代にはそれらは彼の中心的な論題となっていくが，それが直ちに「芸術と技術」，つまり芸術と技術との関係性そのものの主題化を意味するわけではない。したがって本論文の成否は，第一に，「芸術と技術」という主題の展開が「有の問い」の展開と根本的な連関をもっていることをどれだけ説得力をもって提示できるか，第二に，「芸術と技術」という主題が「有の問い」では表立っていなかったハイデッガーの思索の局面をどれだけ明るみに出すことができるか，ということにかかっている。

そして，本論文はその両者についてかなりの程度，成功している。

ハイデッガーは二〇年代前半におけるアリストテレス研究において，古代ギリシアの有の理解が「ポイエーシス」に定位したものであると論究しているが，論者はここに，「被制作性」という西洋形而上学の歴史を貫く有の理解の発端を見出す。他方，論者はまた「芸術と技術」という主題を，アリストテレスのテクネーとポイエーシスとアレーテウエインをめぐるハイデッガーの論考から掘り起こしてゆく。そして，これらのテクネーやポイエーシスやアレーテウェインといった概念に内包された問題連関が『有と時』に持ち込まれてゆき，「有の意味への問い」に仕上げられてゆくことを論者は跡づける。さらに，『有と時』の日常性の分析の中に，物の物たる本性を保持する有り方と，物を現存性として自明的に見る有り方とが見出されることを確認する。現有に出会われる世界のこの二義性の中に，論者は「芸術と技術」という枠組みで考察されるべき問題の萌芽を認める。つまり，この二義性はやがて，有の近さのうちに住むこととして象徴的に語られる「四方界」と，現代技術の本質である「集立態」によって規定される世界とに展開すると捉えられるのである。このことは，『有と時』の思索の中に「芸術と技術」を主題化するに至らしめる問題連関が潜んでいることを意味し，その問題連関を論者は「世界の意味」として提示する。

ハイデッガーの思索を貫く根本契機が「世界の意味」の探究であると捉えることが，本論文における，「有の問い」の展開と「芸術と技術」という主題の展開との相互浸透の解明を可能にしている。「有の問い」の展開は「意味」そのものの探究と理解の深化として受けとめられ，「芸術と技術」という主題の深まりによって「技術的世界に覆蔵されている意味」が問題化してくると解されてゆく。「技術的世界に覆蔵されている意味」の探究は，集立態の世界と四方界の世界とが如何に関わり得るかということの探究であり，ここに，芸術と技術との関係性そのものという本論文の問題の所在が最も鮮明に示される。この関係性を規定するのが，「性起における転回」である。

このようにハイデッガーの論考を組み立てることによって，論者は「芸術と技術」という主題が「有の問い」の展開のなかで鳴り響いていることを，十分納得させる。

そして，論者が「芸術と技術」に解釈の視座をとったことによって新たに見えてきたものはいろいろあるが，特筆されるべきは，ハイデッガーの詩作や技術をめぐる思索のもつ根本的な途上性である。論者は「芸術と技術」を「決して終わることのない課題」として捉え，ハイデッガーのそれぞれの時期の思索がこの課題をそのつど特定の角度から照らし出すものであると解している。ヘルダーリンの詩作との対話の中で行われるハイデッガーの思索に対しては，一般に，まるごと受け容れるか，まるごと退けるか，そのどちらかの反応を誘発するのが常である。その思索が，ハイデッガー語と揶揄される独特の言葉を駆使する論駁不可能なものに見えるからである。彼の技術論が大きな注目を集めながらも，十分な現代的意義をもつに至らないのは，何よりもその故である。実は，本論文もまたハイデッガーの術語を用いてハイデッガーの思索を解釈するという論述に終始し，全的受容と結びつく考察の内閉性を克服してはいない。だがそれにも拘らず，論者は，芸術作品からの目配せを受けての思索が課題への限定された応答であり，繰り返し繰り返しやり直されるべき試行であることを明らかにすることによって，ハイデッガーの思索に対しては全肯定でも全否定でもない批判的で生産的な傾聴こそふさわしいことを主張している。それは，ハイデッガーの思索から現代の我々が新たな示唆を受け取る出発点となりうるものである。

本論文には個々の思想内容について十分に論を尽くしていない箇所も含まれるが，膨大なテクストを緻密に読解して独創的な視座を打ち出したその力量は，高く評価される。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2003年3月4日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果，合格と認めた。